番外編　幻想入りのお話

月陰　甕

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

人間が力をつけ、妖怪の住処を侵食しつつある現代。

とある妖怪狸は、ひょんなことから妖怪に絡まれるさとり妖怪を助ける。

これが彼女たちと妖怪狸の出会い、そして始まりであった。

古明地姉妹の幻想入り前のお話です。

＊オリジナル要素多数含むので、苦手な方は注意!!

目次

第1話 …… 1
第2話 …… 6
第3話 …… 18
第4話 …… 28
第5話 …… 44
第6話 …… 52
第7話 …… 63

第1話

雲に月が隠れては浮かぶ朧月の中。

周りも静になる丑三つ時。月明かりに照らされる野ざらしの切り株に腰掛け、ある妖怪はキセルを片手に物思いにふける。

口元にそれを運び、一服した後、深く白い煙を吐き出す。

「うまくいったかのう…。」

妖怪の脳裏には幻想郷へ先ほど旅立った妖怪の、出会った時の出来事が浮かんでいた。

妖怪が住まう隠れ区域、結界を隔たて外の世界の人の住む裏側の世界にそれは位置する。まるで表と裏、光と影のように。

人間は文明を発達させ、機械を作り、そして夜であっても人工的な明かりを作ることにより、昼夜問わず賑わいを見せていた。

だが、それは自分たち妖怪にって喜ばしいことではない。人工的な明かりは妖怪たちの目をくらませ、そしてその住処は人間の住処へと侵食されていた。昔は怖れを感じ畏

怖の対象となっていた自分たちが、文明を発達させ怖れに対抗するように兵器を確立させた人間に怖れを抱くようになるとはまさしく滑稽だろう。対抗したものもいたが、その文明の前に無力であった。

妖怪はその裏側の、人目につかない区域で住まうしかなかった…。

ある日のこと、儂は買い出しに出ていた。「区域」の市の買い出しの途中、そこである光景を目にした。

桃色髪の少女と緑色髪の少女がある妖怪に罵声を浴びされている。そしてそれを避けるような目で通行人は素通りしていた。

儂はふと気になりその少女の風貌に目をやる。桃色の少女、緑色の少女のどちらにも自前の目の他に「目」が存在していた。

さとり妖怪は元来、「人の心」を読んでしまう性質から、人々にもそして同族の妖怪からも嫌われている種族である。

先代から少しばかりの知識は得ていたが、実際に目にしたのは初めてであった。と、思った最中罵声を浴びていた妖怪が興奮したのか緑色髪の少女の胸ぐらを掴み殴り掛かるようとする。必死にそれをさせまいと桃色髪の少女は緑色髪の少女の掴んでいる手に掴みかかる。

だが、妖怪の反対の腕に掴まれ、地面に叩きつけられた。「かはっ」と少女のか弱い声

が漏れる中、儂の中で何かがきれた。

そして、儂は再び殴ろうとするその振り上げた拳を掴む。

「あ!?、てめえなんだ?!」

「…事情は知らぬが、年端のいかぬ少女相手に手を上げるのはいかがなものかと思うぞ」

「てめえに何がわかるんだってんだ!?こいつらは生きる価値もないってのによ!!」

「…」

緑色の髪の少女は目の前の暴力を振られる光景が目に見えていないのか、虚ろな目をしていた。そこには、恐怖という感情が浮かんでないように見えた。

そして、「目」は閉じていた。

「…こ奴らが何をしたかは問うまい。だが、そちらも一人前の妖怪であるならば弱きものに手を挙げても仕方なかろう」

「うるせぇ!」

興奮した妖怪は儂の手を振りほどこうと腕に力を籠める。

「言葉で言っても通じぬか、ならば、致し方ない」

儂は懐より葉っぱを一枚取り出し、妖怪の腕に置く。そして、「能力」を使う。「ぽんっ」という音が鳴り、妖怪の姿が可愛い子犬に姿を変える。

子犬は突如小さくなった自分の姿に驚き、自分の姿を変えた妖怪が遥か格上のもので

あったと知る。そして、きゃんきゃんと吠えた後、逃げるように雑踏の中に姿を消した。

今起こったことに対し、当事者の二人の少女はぽかんと口を開けていた。儂は、その少女たちに「大丈夫かの？」と声をかける。

ハッと気づき、桃色髪の少女は開口一番「ありがとうございました！」と頭を下げてきた。緑髪の少女はまだ状況を飲み込めないのか虚ろな瞳のままであった。

その光景を見て、桃色髪の少女は弁明するように「すみません…」とまた頭を下げる。

「礼や弁明はよい。それよりも何があったか話してくれるとありがたいのじゃがの」

「はい…」桃色髪の少女は俯き顔のまま力なく答える。そして一連の事情を見ていたやじ馬がヒソヒソと話声を始めた。

「ほら、あれってさとり妖怪の…」

「え、あのさとり妖怪なの…？」

「…少し場所を変えるかの。」

「え…？」

桃色髪の少女が疑問の言葉を言うのと同時に、儂は先ほどと同様に懐からはっぱを取り出し、桃色髪の少女と緑色髪の少女にそれぞれの身体に置く。

そして「能力」を使い、少女たちの姿を二匹の猫に変える。二匹の猫が驚き、逃げる

前に拾い上げ、その場から脱兎のごとく逃げ去る。

第2話

二人の少女（猫）を連れ自分の住処に戻ったのち、追手が来ていないのを窓越しに確認する。自分ながら面倒なことに首を突っ込んでしまったものだと半ば自嘲気味に思ってため息をつくと、足元に不安な声で猫がすり寄ってくる。

「おお、すまんの、ほれ！」猫の顔を優しくなでるように「能力」を解除する。その瞬間、桃色髪の少女と緑色髪の少女が姿を現す。

二人は自分の姿が戻っていることに再び驚くと儂に対して改めて頭を下げる。緑色の少女は少しだが先ほどよりは表情に感情が戻ったように見えた。

儂は二人分の茶を用意し、二人を居間に通す。相変わらずの緑色髪の少女の表情を心配しながら、桃色髪の少女は重い口を開いた。

「私たちは…、さとり妖怪です。ご存知の通り昔から、私たちの種族はこの「さとり」の能力から人々から妖怪から嫌悪されてきました。しかし、最近その畏れられた能力を利用し外の人間に対抗しようと考える妖怪が現れたのです。「さとり」の能力を使い、人間の考えを読みその裏をかいて人間に復讐を企てるものたちです」

「なるほどのう、それがさっきの輩という訳か…。大方、その組織とやらから逃げてきた

といったところじゃな?」
「はい…、私たちはその組織のことはまったく知らされていませんでした。私に「人間の思考を読む仕事」があると言ってきた妖怪も詳しくは知らされていなかったようで、私の能力でも組織の画策であるということは後から知ったことなのですが…。人間への恨みがないといえば嘘になります…、でも私は人の悲しむ姿やその心が理解できる。そういう感情は人間も妖怪も変わらないのです。私は復讐に身を投じようとする妖怪に訴えてきましたが、裏切り者呼ばわりされ、組織から追われる身となりました…。」
「…幼い外見ながら、随分な人生を送ってきたのじゃな。…してこの子はなぜ「目」をとじている?」
「この子は…私の妹は…、私たちがまだ幼い時、まだ人間と妖怪の隔たりがなかった頃に人間の子とよく遊んでいたんです。
その時はまだ「目」が見えていたのですが、妖怪と人間の隔たりが大きくなるにつれ、その人間の子にも妖怪に対する「敵対心」が芽生え始め、ある時それが言葉や態度になって一気にあふれ出しました。私は、その場にちょうど居合わせれなかったのですが、この子は心に深い傷を負ったようで…それ以降「目」は閉じたままなのです。」
「「目」をとじたさとり妖怪…。人の心を読むさとり妖怪からだからこそ、心への言葉の鋭利さがじかに伝わったのかもしれぬな」

「それにあの人間は信頼していましたから…、この子の心の傷は私の能力でも見ることはできないくらい深くどうしようも…」
「…」
桃色髪の少女の言葉に儂は言葉を失い、しばらく考える。事情は相分かった。見たところ、組織からの追われ者ということじゃから長居はできん。
この住処を連中に突き止められるのも時間の問題じゃろう。その間、この子たちをここで匿うのにはこちらも限界がある…。それに緑色の髪の子のことも
何とかしてやりたいがの…、うむ、どうしたものか…。
「あの…」
桃色髪の少女はおずおずと喋りだす。
「私たちがここにいて迷惑なのは重々承知しています。今回助けていただいたのは本当に感謝しています。ですが、貴方にまで迷惑はかけられない…。」
「して…いくアテもなかろう、儂のことは気にするな。この住処は特殊な結界が施してあるから、そう簡単には見つからんはずじゃ。」
「でも…」
「それならば…儂がいない間ここで留守番をしていてはくれんか？ちょいとばかし用事があったのを思い出しての。なに、3日ほどすれば戻ってくるから案ずるな、その間、こ

この部屋の寝食は好きにするがよい」

唐突な提案に桃色髪の少女は一瞬言葉を失う。その隙をついて儂は半ば強引に居候を押し付け、部屋の出口へと向かう。

「あ、あの！」

桃色髪の少女は呼び止める。その声に振り替えると「本当に…ありがとうございます…！」

儂の真意を読んでいるからかそうでないのか少女の目には涙が浮かんでいた。そして深々と頭を下げる。それを見届け、儂も照れ臭くなり、足早に玄関へと向かう。

今回の頼まれごとは少々骨が折れそうだ。そう思いながら決意を新たに、一匹の妖怪狸は住処をあとにする。

人間の住む街と妖怪の住む隠れ区域、その境目に佇んでいる閑散とした建物。昔は人間の建物であったのだろうその建物は現在は塗装がはがれ、窓もところどころ割れている。あからさまに人間が住んでいないこの場所は、外の人間からは「幽霊スポット」として知られているらしい。そしてここでの行方不明者も多数出ているとの報告も耳にしたことはある。だが、もしそこに妖怪が住んでいるとなればどうだろうか。興味本位で自らの住処に飛び込んできた生きのいいエサは彼らにとってごちそうに他ならない。

また、人間の情報を集めるうえでも人間の街に近いこの場所ならばうってつけという訳だ。つまり、ここに「組織」があるということになる。

そして、どうやらその勘は正しかったらしい。「ウゲッ」という下品な声と共に最後の一人が壁に叩きつけられる。

壁に叩きつけられ、かろうじて意識が残っている妖怪は、助けを呼ぼうと合図を送る用意をする。だが、手にしたそれは蹴りによってはじき返されそして顔面に追い打ちの蹴りが放たれる。

「グハッ」という言葉と共に意識を失いそうになる妖怪を掴み、妖怪狸は尋ねる。

「一応、確認するがここが「人間に復讐するための妖怪組織」というので正しいかの？そしてそちがその親玉ということで。」

「てめえ、こんだけの人数をたった一人で…何者だ…？」

「なに、今となっては忘れられた妖怪の一人じゃ。名乗るものでもない。して、質問には答えてもらおうかの」

追撃の拳を目の前に突きつける。その仕草に親玉と思われる妖怪は息をのみ慌てたように、そして吐き捨てるように言葉をつぐむ。

「ああ、わかったよ。あんたの言うとおりだ。で、俺の組織をぶっ潰して何の用だ？あんたも妖怪なら人間に恨みつらみがあるんじゃねえのかよ。」

「…恨みがないとは言わん。儂の先祖もその抗争で命を落としておるからな。だが、儂は先代から一言も人間を恨み、復讐しろとは言われておらん。それだけの話じゃよ。」
「…それじゃ、人間に復讐心もねえあんたがなぜ俺の組織に歯向かう?」
「さとり妖怪」その言葉に親玉はビクッと震える。「あの二人に何をさせていたかは儂は知らん。だが、二人のさとり妖怪についての追跡及び捕縛を辞めてもらいたのじゃが?」
「な…、何を言ってやがる。居場所のなかったあいつらに居場所をくれてやったのは俺らだ。その恩に報いるのが組織ってもんだろうが」
「組織に歯向かうとわかったら、殺すのが組織なのかの?」
「…」
妖怪狸の言葉に親玉は黙り込む。そして諦めがついたように深くため息をつく。
「わかった、あいつらからは身を引いてやるよ。あんたみたいな用心棒がいたんじゃこっちとしても割に合わねえしな。だが、どっちみちあいつらさとり妖怪には居場所なんてないんだ。それぐらい、あんただってわかっているだろう?」
「…わかっておるさ、そのための策も用意してある」
それを聞き、驚いたように親玉は目を見張る。それに応えるように妖怪狸は笑って見せた。と同時にその手を緩める。

　そのまま立ち去ろうとする妖怪狸に戦意を喪失した親玉は声をかける。
「なあ、あんたの名前教えてくれねえか」
「二ツ岩、佐渡の二ツ岩じゃよ」
　その言葉を聞いて親玉はハッと息をのむ。かつて同じ通り名で妖怪の百鬼夜行の頂点いたもののことを。ただ静かで聡明であり、そして自然と慕われ続けていた妖怪狸のことを。あの妖怪の…なるほど、それじゃ初めから敵わなかったてことか。
「なあ」親玉は再び妖怪狸に声をかける。
「なんじゃ？」
「…組織は解散する。あんたみたいなのに目をつけられてたんじゃ話になんねえからな。もう一度俺らにできることを探してみるよ、復讐とかじゃない別な方法で。それから…、もう一度会ったら俺と手合わせしてくれ。やられっぱなしは性に合わなえからな。」
　妖怪狸は親玉の言葉に一瞬キョトンとした顔を作ると、ふっと優しい表情に戻る。
「…望むところじゃ、いつでも相手になるぞ」
　言葉を交わし終えた後、妖怪狸は出口へと向かう。かつての「二ツ岩」に図らずとも似てきていることに彼女は知らない。

妖怪狸は森に来ていた。この森は人間側の領地にある特殊な森だ。その昔、神様という存在がいた時代に信奉されていたという神聖な場所でもあるが、人間が妖怪を含めたオカルトを否定し始めた現在においては、あまり人が立ち入らない場所とされていた。人間側の領地ということで妖怪狸も能力で「人間」に化けているわけだが…、ここにも

似たような妖怪がいる。最も彼女は「人間」には化けないのだが…。

「…いるかの!!」

森の奥深く、身の丈の倍以上もあるご神木を前にありったけの声で呼びかける。しかし、その返事はなかった。

やれやれ、出直すか…。と踵を返すと同時に「何か用かい?」と返事が返ってきた。

ふと背後に振り替える。が、そこに目的の者はいなかった。と同時に森全体が震えるようなざわめきを見せる。まるで森全体が鼓動するように

森が話をするかのようにその声は妖怪狸にささやく。

「見つけごらんよ、そしたら用事を聞いてあげる」

「相変わらずのかくれんぼといったところかの…。望むところじゃ…!」

妖怪狸はやれやれといった仕草で、隠れた相手を探る。さて、今回はどこに隠れたものか…、いや化けたものか…。森は緑一色に染まっておりその中から保護色で隠れてい

る「あやつ」を見つけ出すのは難しい。じゃからと言って手持ちの道具ではおびき出すこともできぬ…。ふむ、どうしたものか…、と頭を悩ませていると。

「あ、黙ってても面白くないから制限時間つけるね。あと1分～」

その言葉に妖怪狸の思考が怒りでプッツンと切れると同時に、簡易的な探索方法を思いつく。懐から一枚の葉っぱを取り出すと、それを手のひらにのせ「能力」を使う。と同時に、その手のひらに青色の炎が出現した。妖怪狸は熱がりもせず、その炎の塊を目の前のご神木に投げつける。と同時にご神木が青色の炎に包まれた。

「ちょっ、ちょっ、ちょっと、何してんの!?」

声の主は慌てた様子で取り乱したように声を発する。と同時にご神木周りの視界に一瞬の揺らぎができる。妖怪狸はそれを見逃さず、その空間に向けて目の前に落ちていた手のひら大の石を投げる。ガツンという鈍い音がして、何者かに命中した石は重力に従って落ちてくる。と同時に隠れていたものが落ちてきた。ギャフンと落ちてきたそれは背中に三本の青い矢印の羽と赤い鎌のような羽を生やしていた黒髪の少女であった。

「いたたた、ちょっとは手加減してよ～」

「すまんの」

簡素なやりとりに昔ながらの旧友はふくれっ面をする。そして慌てたように、ご神木

へ振り替える。
「ちょっとやりすぎだってば、燃えてるじゃん!!」
「安心せい。ただの偽火じゃて。」
そう言うと、ご神木にまとわりついていた炎は徐々に鎮火し始め、ものの数秒後にはもとの静けさを取り戻していた。
「ふいー。というか、いつもなら優しくかくれんぼしてくれるじゃん。今日に限ってどうしてこんな慌ててるの?」
「ちょいとばかし、急ぎの用事での。それにぬしにしか頼めない用事であったからの。」
「へえ〜、あたしにしか頼めない用事って、珍しいね。マミゾウだったら全部ひとりで片付いちゃいそうな気もするけど」
「…」
旧友のその言葉に少し妖怪狸は押し黙る。機嫌を損ねたと感じた少女は慌てて弁明の言葉を言う。
「冗談だって〜!そんな怒んないでよ。マミゾウだって1人じゃできないことだってあるよね。」
明るく返すその言葉に妖怪狸は半ばため息をつきながら、一枚の写真を取り出す。
「これ何?」

「今回の頼み事じゃ、ちょいとその人間に化けて欲しいのじゃよ」
「ねえ、それって私の能力じゃ無理そうじゃない？どっちかといえばマミゾウの方が適任なんじゃ…。」
「儂じゃ無理なのじゃよ。姿形は真似ることはできてもその性格や人物像までは真似ることはできん」
「性格や人物像…なるほど、あたしの正体不明の能力を使ってその相手の記憶からそれらをカバーできればばれないで済むってことね」
「そういうことじゃ」
「オッケー、で化かす相手は誰なの??」
「さとり妖怪じゃ」
「オッケーオッケー、さとり妖怪ね。……さとり妖怪!?そんなんすぐばれるに決まってんじゃん!!」
「そこのところをうまく化かすのが本職の見せ所じゃろう。」
「いや、無理だから!!絶対化けの皮はがれるって！」
　かつてないほどの難題を突き付けられ、パニックを起こす少女に妖怪狸はその肩を掴み、向き直る。
「ぬえ、これは主にしか頼めんことなのじゃ。頼む」

いきなりの真剣な雰囲気での頼みごとに少女は妖怪狸から目を逸らす。
「いや、嫌じゃないのよ。マミゾウの頼みなら仕方ないしね。でも、こんなのいきなりすぎるっていうか心の準備ができてないっていうか」
少女のぎこちない答えにいまいちの反応とみた妖怪狸は最後の賭けだと思い、こう告げる。
「そうか…、無理やりですまんかった。でも儂にはおぬしが必要なのじゃ…頼む」
少女の顔を真正面に向き直し、頬に手を当てるその仕草は端から見ればメロドラマのワンシーンであろう。
案の定、少女のメモリ許容値は上限を超えてしまい顔面は沸騰直前であった。
「わ、わかった!!やる!やるからあんましこっち見ないで。」
「ありがとう、ぬえ」
少女の快諾に笑顔で応じる妖怪狸。その天然さが恨めしいと思いながら、少女は落ち着きを取り戻す。
「で、具体的に何をすればいいわけ?」
「ああ、それはじゃな…」

第3話

ぬえとの一件を終え、何とか依頼をお願いすることに成功した妖怪狸は、人間に化けたままとある場所に向かう。先代から聞いていただけではあったが、かつて結界により世界を二分にした妖怪がいた。そのものの持つ結界は強力で、当時先代でさえその力には敵わなかったらしい。そして現代からは忘れられたかつての強者・鬼、天狗、河童、を引き連れて新しい世界へと向かった妖怪。名を八雲紫。

こちら側の妖怪の中では昔を知るものは先の抗争でいなくなり、知るものぞ知る名前となってしまったが、その名を妖怪狸はしっかりと覚えていた。

「ここかの…。」

人間の街から外れ、そして妖怪の区域からもひときわ離れた場所にひっそりと佇む古ぼけた神社。その鳥居の上にはかすれた文字で「博麗」の二文字がかかっている。

博麗神社。かつて名高い宮司がそこに勤めていたが、時代の流れによりオカルトが風化した現在と共に姿を消したらしい。まるで神隠しにでもあったように。

そしてこの神社にはもう一つ噂があった。この神社にお参りしたものは神隠しにあってしまうというものであった。

半ば面白半分で作られた都市伝説まがいのものであろうと思っていたが、神社の鳥居をくぐってからその考えは変わった。

…視線を感じる。あからさまにこの敷地内に入る者を監視、拒むようなねっとりとした視線を感じるのだ。現代に残る屈指の妖怪である妖怪狸でさえ足が掬われそうになるこの威圧感に、普通の人間ならば狂気で発狂してしまうものもいるかもしれない。その悪寒の走る視線を受けながら警戒の姿勢は崩さず妖怪狸はその石段を上る。

一段一段と登るにつれ、神社の境内が見えてくる。と、そこには先客が一人いた。頭には白い帽子をかぶり、そして身体には紫のドレス風の衣装に身をまとい、手には扇子を持っている。

端から見れば、どこかしらの豪華な舞踏会にも出てきそうな出立の女性がこちらを気にせず躍っているのが見えた。月明かりに照らされたその女性は一層美しく妖怪狸は見惚れる。

だが、ふと我に返り神社に不釣り合いのその出立に一層警戒心を強めながら妖怪狸は尋ねる。

「もし…」

「…何かしら?」

紫の女性はこちらに目もくれずに応える。

「…ここには神隠しの噂が流れておるはずじゃ。舞の練習もするのも構わぬがもうこんな夜更けじゃ。どこかしらの妖怪に取って食われてもかなわん、お節介だと思うが、そろそろ帰ってはいかがなものかの」
「帰る？…ああ、そろそろそんな時間だったわね。そろそろ帰らないと藍に怒られてしまうわ」
　紫の女性はそういうと帰る身支度を始めるかと思いきや、そのまま神社の中に入っていこうとする。
　その姿を見て慌てて妖怪狸は声を返す。「お嬢さん、帰るのならこちらの石段の方ではないのかの？」
「いいえ、こちらであっていますわ」そう返す紫の女性の言葉に一瞬思考が追い付かずに妖怪狸はぽかんと呆ける。
「だって私は…向こう側の妖怪ですもの」その言葉を聞いた瞬間、妖怪狸にこれまでに感じたことのない悪寒が走る。と同時に自分の周囲の空間が裂けるのを見た。
　そしてその向こう側に無数の卒塔婆が見え、妖怪狸の視界がそれらをとらえた瞬間、同時に射撃された。
「ズガガガガ」と無数の卒塔婆が鈍器と化し、取り残された者を襲う。妖怪と名乗った女性は、その様子を一瞥し、はあとため息をつく。

「また藍に小言を言われるかしら…。」おそらく帰ってくるのが遅くなった理由と1人殺めた理由で問いただしが始まるのではないかとこれからのことに身震いをしながら、ふと死体に目をやると、…違和感に気付いた。

先ほどの者がいない。おかしい、青山の前段命中の手ごたえはあったはずなのに、死体が転がっていないなんて…。

「なるほど…今のが境界を操る力という訳か…」ふと聞こえたその声に紫の女性はハッと振り返る。そして振り返った矢先には殺したはずの者が立っていた。いつの間にか手にはナイフが握られ、紫の女性の喉元に突きつけられている。

「あら、見かけによらず身軽なのね」

自分が窮地に陥っている状態とも関わらず、紫の女性はそう答える。その口ぶりには焦りというものが全く見えない。

「それで?私を拘束して何をしようというのかしら、人間さん?いえ、人間に化けた妖怪さん?」

自分のことを瞬時に言い当てたその見当さに多少驚きはしたものの、向こうも手の内を見せているのならばと思い、妖怪狸も「能力」を解く。

ポンッと音が鳴り、持っていたナイフが葉っぱに、そして自身の姿も元の妖怪の姿に戻る。

その姿を見て紫の女性は、「おお！」と拍手する。
「化狸の妖怪だったのね！何かしら狐の類かと思ったけど、って狐はうちにもいるけど違うのよね」そう言い、紫の女性は自宅にいるであろう小姑と化した
自身の式神について思い出す。そんなマイペースな妖怪に多少訝しげに思いながらも、妖怪狸は尋ねる。
「改めてじゃが…、そなたが八雲紫じゃな？」
「ええそうよ、よろしくね化狸さん？」
「偉大なる幻想郷の大妖怪に失礼な態度になってしまったこと心よりお詫び申す」そう言うと妖怪狸はぺこりと頭を下げる。
「いえいえ謙遜することはないわ。外の世界の妖怪で私の攻撃を全くの不意打ちから避けたのは貴女が初めてですもの、むしろ誇るべきだわ！大妖怪の
攻撃を儂はかわしたぞってね！」
そう言うと八雲紫は、ふんぞり返って威張るポーズをとって見せる。その姿に幻想郷の妖怪の偉大らしさが自分の中で崩壊しつつあることを感じたが、自身の頼み事を口にする。
「八雲紫殿、実は相談したいことがあってこの地まで来たがどうかお聞き入れることをお許し願いたい、昨今事情があって二人のさとり妖怪を儂の住処で匿って居るが、彼女

らにはこの地に住むべき場所がない。いずれ人々から妖怪から迫害され消えていく妖怪ならば、いっそのことそちらの世界で住み、生活することが彼女らにとっても良いことであろうと儂は思う。どうか彼女らの移住を受け入れてはもらえないであろうか」

そう言って、妖怪狸は頭を下げる。その姿に八雲紫は「うーん」と考えるポーズを見せた後、「いいわよ」と返事を返す。

「ありがたきお言葉感謝申す、それでは…」と頭を上げた妖怪狸の口元に八雲紫の人差し指がビッと刺さる。突然のことに頭に疑問符を浮かべる妖怪狸に八雲紫は答える。

「その言葉、もうちょい砕いた感じで喋って構わないわ、というか砕いてもらわないと私が疲れる。それと、私のことは紫でいいわよ」

そう言うと八雲紫は笑って見せた。その言葉に大妖怪の元々の気質が混じっていることを感じ、妖怪狸はフッと表情を柔らかくする。

「それでは…紫殿…幻想郷への移住に関することについて色々と聞きたいのじゃが…」

ぎこちない敬語と普段の喋り方が混じっているその口調に笑いをこらえながら八雲紫はその返答を聞く。

「ふふっ、…ええ、わかったわ。移住に関しだけど特に必要な書類は無いわ。その子たちの荷物だけで十分よ。あ、それからあれが必要だったわね。どこに仕舞ったかしら」

と八雲紫は空間に裂け目を作り、そこに手を入れ、棚の引き出しの中を探るようにそ

の空間の中を手で探る。その光景に妖怪狸は戸惑いを隠せなかったが、これも八雲紫の能力、境界を操る力であるのだと納得する。

　しかし、戦闘にも普段の生活にも境界を作ることができるとなるとこの妖怪は本当に妖怪なのであろうかという疑問さえも浮かんでくる。境界を隔てる、それは天と地を分け隔てるまさしく神のような行為である。妖怪らしからぬこの能力を持つ彼女は一番神に近い存在なのかもしれない。

　そう思ったところで、八雲紫が「あ、あったわ」と声を漏らす。取り出されたものは招待状のような形をしたもので見開きタイプの白い紙であった。

　そして妖怪狸に2通のそれを渡す。

「それが「切符」になるわ。幻想郷へ移住する妖怪は各個人がその「切符」を持っていることが最低条件となる。それを途中でなくしたりしたら途中の得体の知れない境界の境目で下車することになるわ」と笑って解説をする。さらっと聞きづてならない言葉がよぎり、妖怪狸の背中に冷や汗が流れる中、

「冗談よ」と八雲紫は笑う。やはりこの妖怪のペースは分からない…、と頭をかきながら無くさないようにその「切符」を懐に仕舞う。

「それから乗車場所は各個人の住処…ということで良いかしらね。時間は今日より5日後の子の刻よ。」

「乗車…ということは電車で迎えに来られるのか？」
「そうよ！幻想郷行特急列車！名を…」「あい分かった、それでは他に気をつけることはあるかの」
徐々に八雲紫のペースに慣れ、話の区切りもわかってきたので、妖怪狸は次の注意事項へと話を切り替える。
話の腰を折られしゅんとした八雲紫はバッと扇子を広げて顔を隠す。そしてその表情を扇子で隠した後「ええ、「切符」の中の文面をよく読むことね。それが幻想郷で生きていけるかに関わってくるわ」と恐ろしく冷たい声で言った。
戦闘時の悪寒を感じた時と似た冷たい声に一瞬妖怪狸は身震いする。
「逆に文面を読んだうえでルールに沿って行動できるのなら幻想郷側としては大歓迎ですわ」八雲紫は扇子をとじ、笑顔を浮かべ先ほどのお茶らけた口調で言った。
底知れない八雲紫の恐ろしさを垣間見た妖怪狸はゾッとする。戦闘時に感じた悪寒、さらには鳥居内に入ってきた時より感じた視線はすべて八雲紫の能力によるものであったが、これらは彼女の感情に恐ろしく依存するのではないか。彼女が残酷になればその能力も力を増す、まるで研がれたナイフがいともたやすく紙を引き裂くように。
ルールに順じないものに対しては一切の容赦がなく、妖怪も人間も排除の対象になる…。そんな予感を感じながら、妖怪狸は一抹の不安を覚える。

妖怪狸の不安な表情を見ながら、八雲紫は言う。「大丈夫よ。基本、向こうはこっちと違って妖怪と人間はそこまでの隔たりはないし、妖怪が人間と共存している箇所もあるわ、彼女たちならうまくやっていけるはずよ」

見当違いではあったが、幻想郷とこちらの世界との違いを対比により、少なくとも幻想郷にいる方が彼女たちの精神面からしてもよいだろうという結論に改めて達する。

どのみち、組織の親玉の言う通りこちらの世界に望みがないのなら、幻想郷に望みを託すしかないのだ。今、儂がしてやれることはこれしかない。

「…大方こちらの質問疑問は聞いて取れた。それでは、5日後の子の刻でまたお会いしましょう紫殿。」

「そうね、私もそろそろ藍がキレると思うから帰らせてもらいますわ」そう言いつつ、八雲紫は欠伸を一つする。そして神社へと向かう。

そして神社の賽銭箱の前で空間に裂けめを作り、自分が通れるほどの境界を作る。境界の裂けめに消えていこうとする八雲紫を眺めながら、妖怪狸はふと今まで疑問に思っていたことを口にする。

「紫殿」「何かしら?」八雲紫は振り返らずに応える。

「いつから儂が人間でないと気づいていた?」その疑問に応えるように八雲紫はふとその歩みを止める。

そして振り返りお茶らけた声でこう言った。

「最初からですわ♪」

その言葉を最後に残し、八雲紫は境界の向こう側に姿を消した。と同時に空いていた空間の裂け目も閉じ、境内に充満していた目の視線も消える。

妖怪狸はしばらくの間、動けなかった。八雲紫という偉大なる妖怪から感じた恐怖は彼女にとって初めての経験となり、その悪寒は八雲紫が境界の向こうに姿を消してからも、すぐに消えることはなかった。

第４話

少女は夢を見る。あの日のことを。

私はさとり妖怪だった。だが、周囲の人間からは親しい仲にあった。それは私がまだ「さとり」として覚醒していなかったからであろう。

胸の「目」は開いているにもかかわらず、人間の心を読めずにいた。

私には仲の良い人間の友達がいた。私と背丈も同じくらいの人間の男の子。お姉ちゃんと一緒に三人で遊ぶのが日課となっていた。

「今日は何をしようか？」「うーん、それじゃ僕はかくれんぼがいい！」「よしそれじゃじゃんけんで鬼を決めよう！」

そんなたわいのない日常がいつまでも続くと思っていた。

私が男の子と遊んでから１０年が過ぎた。私もそれなりに成長し、男の子も立派な青年に、軍の有志に選ばれるほど立派な軍人になっていた。

お姉ちゃんは「さとり」として覚醒したらしく、それからはあまり人と接していない。人間と接するのが怖くなってしまったらしい。

私も「さとり」として覚醒したら人間が怖くなるのだろうか…。そんなことを思いな

がら、いつもの待ち合わせ場所に向かう。
「ごめん、待った？」
「いや大丈夫だよ」
　黒い帽子に軍服姿の彼は笑って答える。胸には一級軍人の証である金の勲章がぶら下がっており、腰にはサーベルを刺していた。そしていつもと同じくたわいのない会話が始まる。最近の近況や辛かったこと、面白かったことを話すのが私たちの今の日課となっていた。
「それでね、そのあとおじさんが駄洒落を言ったら、みんな静まり返っちゃて滑ったのなんのって面白かったの、みせてあげたかったな～」
「それは面白そうだね、今度行った時に見てみたいな」
「でしょ～、それでねその次に…」
　私が次の話題に触れようとしたとき、彼の暗い顔が一瞬見えた気がした。
「…どうかした？」
「いや…、ちょっと暗い話になっちゃんだけど思い悩むことが色々あって軍人もちょっと大変なんだ。」
「…私で良ければ聞くよ！話してみて！」私はずいと胸を張って見せる。
　彼の顔がその姿にフッと綻ぶ。彼はこちらから目線を外し、静かに話し始める。

「…最近、人と妖怪の対立が際立っているのは知っている?産業開発は国家のためと言いながら、実際はその実妖怪の住処への
侵攻、妖怪の排除のための兵器開発が目的なんだって。妖怪っていうのは昔から人々を脅かす悪いもの、そういう一部の考えを持った連中にとって…妖怪は外の国からの戦争を仕掛ける者たちと同じ扱いなのかもしれないね。」
彼は力なく笑って言う。そこには彼の疲れた表情が見えた。
「…それじゃ、国家からみたら私たちはのけ者なんだね。」私は半分自虐混じりに答える。
「…」彼は押し黙る。まるで心の中で何かに葛藤するように反芻した後、重い口を開く。
「軍の人間は…国家に従わなくてはならない…。例え、それが間違ったことであったとしても、自分の理念に叶わないことであったとしても…」
私は何と答えてあげればよいかわからなかった。ただ、彼の傍にいて彼の葛藤を少しでも理解してあげることがせめてもの救いだと思った。
私は震える彼の身体に触れようと手を伸ばし、そして触れた瞬間、見えてしまった。彼のことが。
「なあ、お前軍人なのに妖怪を狩ったことないんだったよな。ほら試しに仲良くしているさとり妖怪だっけ?あいつでも狩ってみろよ。
なに一匹狩っちまえば、千匹狩ろうがなんとも思わなくなるぜ。」

「俺は…」

「妖怪との共存を目指す?どうやって共存できるっていうのさ。所詮、奴らは妖怪、俺らを食料としか見ていない捕食者だ。

だったらやられる前にやるのが筋ってもんだろう?これも国家のため、軍人の使命だ、はは。」

一瞬のフラッシュバックに私は頭がよろめき、ついていかなかった。私は、今視たものを心の中でゆっくりと思い出す。今のは…、だとしたら彼は…。

ふと思って彼の方を向く。彼と目が合い、彼はこちらをただじっと見つめる。その姿に、私は…恐怖を感じた。

私を狩ろうとするただ悲しい目がそこにあるのを感じて、私はその目を見つめ返すことしかできなかった。

時間にして数秒時間がたった後、彼が尋ねる。「視たのか?」

私は何と答えていいのかわからず、後ずさりをする。彼の心がゆっくりと変わっていくのが視えた。その心の様を見ていたくなくて私はもう一歩後退する。

「…君が視たものは事実だ。そしてもう一つ付け加えるのならば俺は君が「さとり」になったら狩ることにしていた。「さとり」はさとり妖怪としての覚醒の証。一人前の妖怪を狩らなければ、軍人の恥さらしだからね。」

彼はそう言って腰のサーベルを抜く。その心は…私の知っている彼ではなかった。
「…すまない。」
そう言って彼は私をサーベルで突き刺す。私の中で…何かが壊れる音が聞こえた。
「ザシュッ」という鈍く肉を突き破る音が人気のない周囲に響く。
だが、そのサーベルは私を貫いてはいなかった。私を後ろに押し倒し、代わりにその小さな肩がサーベルに貫かれていた。
「お姉ちゃん…！」
私の前にはいつの間にかお姉ちゃんが立っていた。その方からは真っ赤な血がお姉ちゃんの服を染め始めていた。
「1人で出歩いてちゃ危険だと思って、来てみて正解だったわね。」そう言うとお姉ちゃんは、ジッと彼を見つめる。
突然の知り合いの出現に一瞬戸惑いを見せたが、彼もジッとお姉ちゃんを見つめる。まるでお互いの心の言葉を交わすように。
「…わかったわ。」お姉ちゃんは言った。直後、お姉ちゃんの肩からサーベルが引き抜かれる。と同時にお姉ちゃんがよろめき、私はお姉ちゃんを受け止める。
その肩からは想像以上の出血をしており、お姉ちゃんは意識を失っていた。
そして彼はもう一度攻撃をするためにもう一度構えをとる。その顔には悲しげな表

情が浮かんでいた。
私はもう一度彼の心を読もうとする。が、読めなかった。私の「目」をふと見ると「目」が…閉じていた。
体は彼の心を知りたがっているというのに、私の「心」は彼を拒んでいるからだろうか。そんなやりとりを刹那に考えている間に私の目の前に彼の斬撃が迫っていた。
「そこまでよ」
どこかしらか聞こえたその声に呼応するかのように、私と彼の眼前ちょうどその空間が割れ、彼のサーベルを何者かが受け止める。その突然のことに
彼は驚き距離をとる。彼は突如現れた空間の主に問いかける。
「八雲…!」
「はあい、八雲紫よ。でも、今回はちょっとイレギュラーすぎるんじゃないかしら。よりにもよって貴方が…」
「黙れ」その言葉にわずかばかりの静かな怒り、戸惑い、悲しみが感じられた。
「…ま、人間なら素直にそちらにいるのが妥当ね。それからこの子たちは預かっていくわ。おそらくもう二度と会うことはないでしょう」
そう言って、空間の主は彼に向き直る。彼は無言のまま、構えを解くのをやめない。その葛藤が見破られないように、弱い自分を見せないように。

「…それじゃあね、貴方にも…良い幸運がありますように」
空間の主はそう言うと、自分の出していた空間をとじる。と同時に私たちの下の地面が割れ、同様の空間が開き私たちの身体を飲み込んでいく。
空間に飲まれ切る直前、彼の表情には…涙が浮かんでいるように見えた。
飲み込まれた空間の中で、私は空間の主と対面していた。
「…貴女は先の出来事で「心」にダメージを負っているわ。「目」と「心」は密接につながっているの。「心」がこれ以上ダメージを受けないように「目」をとじる防衛反応を見せたといったところかしら。今は「さとり」になった反動でまだ「心」があるけど「目」を閉じた影響により、徐々に「心」を失うわ。平たく言えば、感情を失うということかしら…。」
徐々に彼女の言っている言葉もわからなくなるくらい、頭の中がぼやけてくる。これが「感情」を失うということなのだろうか。
「大丈夫。今は「心」に傷を負っているけど、いつか絶対にその「心」を取り戻す日が来るわ。私の勘は当たるのよ♪それから、貴方のお姉さんは私がしっかり治しておいてあげる…。だから…今は安心して休みなさい。…おやすみなさい、こいし。」
ハッと目が覚めた時、私は泣いていた。何故だろう何か悲しい夢を見ていた気がする

というのに…思い出せない。

ぼーっとした意識の中、私は体を起こし周囲を見渡す。ここは…、そういえば狸の妖怪さんにここに連れてこられて、それでお姉ちゃんと一緒にその狸の妖怪さんの帰りを待っているんだったっけ。寝ぼけた意識のまま横を見ると、そこにはお姉ちゃんが小さな寝息を立てて寝ている。

ふと玄関の時計を見ると深夜の丑三つ時前の時刻を指していた。そうか、お姉ちゃんと夕食をとってその後片付けをしてそのまま寝てしまっていたのか。

そういえば、今日で狸の妖怪さんが部屋を出てから3日目が経つ。…。

私は「目」を閉ざし、「心」を失ってから表情や考えが希薄になった。何に対しても無関心、興味を持っても長続きがしなく、まるで味っ気のない食事をするかのような毎日に辟易していた。いや、辟易する私自身すらも気にならないほど無関心になっていた。

私の目に映るのは、今はお姉ちゃんだけだった。それが唯一の救いだった。それ以外は、路傍の小石と何ら変わらない。

…いや、もう一人いた。あの狸の妖怪さん。何故かあの妖怪さんは私の目に映る。それは…何故だろう。…何故、何故、何故？

私たちに優しくしてくれたあの人に似ているから…？…あの人？

何かを思い出せそうな気がするのだが…、思い出そうとすると胸の内が苦しくなる。

まるで思い出すのを拒むかのように、私の身体が震える。

ダメだ…。これ以上、何かあってお姉ちゃんを悲しませちゃいけない。きっと思い出さなくて良いことなのだ。それならば、もう一度眠って忘れよう。

夜中ということもあり、昼の気温とはかなり温度差がある。一段と冷たい空気の中私はもう一度眠ろうと思い、毛布をくるむ。

とその時玄関の近く、窓の向こうからちらっと明るいものが見えた。そのまばゆい光は夜の闇に対比し、かなり際立っている。

明るく光るそれは窓の方で光り、前後左右にゆらめく。まるでこっちへおいでと手招きするように。

私は、ゆっくりと体をベッドから起こし、お姉ちゃんを起こさないようにそっと玄関に向かう。それが何なのか、興味が湧いたわけではない。

私は「それが何なのか知らなくてはならない気がして」、それが手招きする外へと向かう。

玄関の戸を開けると外の空気は冷たい…ものだと思っていたが、温かった。それは手招きしているあの光が「篝火」でその熱が夜の冷気を緩和させていたからだった。

私はその「篝火」をじっと見ていた。何故か、私はその「篝火」を知っているような気がする。遥か昔に見た、懐かしい記憶。その記憶が私に問いかけさせる。

「…あなたは…誰…？」

「…こいし…」

「篝火」がかすれた声で私の名前を呼ぶ。その聞き覚えのある声…、私の胸がまた苦しく脈を打つ。苦しい、痛い、悲しい。

私の身体は拒絶反応を見せる…でも、それでも私は問いかける。

「あなたは…誰？」

私の問いかけに応えるように「篝火」が姿形を変える。その姿に私の心は…もう一度開いた。

まるで時が逆戻りした時のように、あの時の感情がフラッシュバックする。苦しい、痛い、悲しい。でも今はそれ以上に…目の前の青年の姿に涙していた。

「…こいし、僕だよ」

知っている声が聞こえる。その声は確かに私が知っている青年の声だった。昔からよく遊び、泣いて、怒られて、そしてお互いのことをよく知っている、暖かい日の光に触れた時のようなこの温もりは…まぎれもなく彼だった。

「…もう二度と会えないんじゃないかって思ってた。お姉ちゃんが私をかばった時から、ううん、貴方が私に斬りかかった時から、もう私のことなんて友達として見ていないんじゃないかって」

私は泣きじゃくりながら言葉をつぐむ。もう嗚咽で自分でも何を言っているのかわからない。

彼はそんな私をゆっくりと抱き留める。

「…辛い思いをさせてしまってごめん。僕はあの時、軍の命令に従うか君との友情を守るかわからなくなっていた…、そして君を殺そうとしたあの日から僕の心にも穴が空いてしまった。きっと僕たちの友情はお互いに切ってはいけないものだったんだ。それを自ら断ち切ってしまった僕の方こそ殺されるべき者だったのかもしれない…。」

彼はゆっくりと語る。そんな彼の姿が小さく震えているのがわかった。

「でも、君が生きているならば…いつかまた巡り合える。そう信じて、僕は待ち続けた。この肉体が滅びても君に会ったら言いたいことが、いや言わなくてはならないことがあったんだ」

彼の身体がゆっくりと透き通っていくのが目に見えた。そして彼は私に向き直る。その顔は涙であふれていた。

「僕と…友達でいてくれて本当に…ありがとう」

そう言うと彼は泣き顔に精一杯の笑顔を作った。私もそれに合わせて泣いている顔に精一杯の笑顔を作る。そう彼の旅立ちを祝うように。

そして彼は、私たちの友情を祝福するように。

彼の身体がゆっくりと透き通り、闇に消えていくまで私たちは言葉を交わすことなくただただ見つめ続けた。心が読めなくても、私たちの友情はすぐそこにある。

きっと彼はそう言ってくれる。だから、私も彼との友情を決して忘れることはない。この「心」で彼と私は繋がっているのだから。

自分の住処の手前、その森の中に妖怪狸は佇んでいた。そして、ぬえに見せた一枚の写真を見る。そこには、1人の青年が写っていた。

ぬえと会う前、妖怪の組織をつぶしてから妖怪狸は人間に化け、ある人物の行方を追っていた。名も知らぬ、そして唯一手掛かりがあるとすれば「さとり妖怪」と仲を持っていた人物、ということではあったが、思いの外早くその人物を見つけることはできた。…が、彼は死亡していた。

聞いた話によると、「軍の中でも妖怪と人間の共存を謳った異端者であり、彼の思想が軍に広まるのを恐れて内部のものが暗殺したらしい」とのこと。

故に彼に関わる資料はほぼ残されていなかったが…、彼の実家での写真が遺留品として残されていた。

その現存の唯一の手掛かりこそが彼女の「心」を救える唯一のものであり、そのためにはぬえの能力を使い、彼女の奥底に眠っている「彼」の意識を引き出す必要があった

訳だが…、ぬえめうまくやりおったなと半ば感心していた。
「…それは間違いね。」
心のつぶやきを見透かされたその声に、妖怪狸はビクッと体を震わせる。気が付くと、桃色髪の少女が傍に立っていた。
「…中で寝ていたのではなかったのかの？」
「…あれだけ激しい篝火だと起きてしまうわ」
桃色髪の少女は半分眠たげな表情をしながら、欠伸を一つした。その胸に携える「目」は逆にしっかりと開いてこちらを見据えている。
「して、間違いというのは？」
心を見透かされるのであれば、何を考えても無駄だと思い、妖怪狸は素直に心の疑問を口にする。
桃色髪の少女は、その「目」を妹の方に目を向け、こう告げる。
「…「彼」は最初からそこにいたわ。あなたのいうぬえという妖怪が最初は「彼」に化けるつもりだったのでしょうが、その妖怪の「篝火」につられたのかしらね。
妖怪の「篝火」を吸収し、具現化するなんて人魂の成せることではない気もするけど…、あの子に会いたいという気持ちがそうさせたのかもしれないわ」
「それでは…、ぬえは…」

「…安心して。ただ妖力が吸収されたぐらいだから、彼女自身が吸収されたわけではないわ。それに、ほら突然のことにてんやわんやしてる」

そう言って桃色髪の少女はクスクスと笑った。

その呟きに妖怪狸はもう一度、緑色髪の少女の方を向き直る。よく見ると、彼女の周りの景色がゆらゆらと揺れている。突然のことに困惑している様子が目に見て取れるが、それでも二人の邪魔はせぬように音や気配はうまく消していた。ああ、確かに滑稽だと妖怪狸は呆れ顔をする。

その様を見て桃色髪の少女はもう一度笑ったのち、フッと表情を改め、妖怪狸に向き直る。

「今回は…私たちのために本当に色々として下さり…、「感謝」…の言葉では言い表せません。本当に…ありがとうございました」

そう言って桃色髪の少女は深々と頭を下げる。

その姿に一瞬キョトンとした後、妖怪狸は照れ臭そうに応える。

「なに、少しばかり気が向いただけじゃよ。それに儂がしたことはすべてきっかけにすぎん」

「そのきっかけでも、私たちにとってみれば希望でした。あの子も「心」を取りもどすことができましたし、私も組織から助けていただきました…!」

少女は深々と頭を下げたまま涙を浮かべる。その姿に…、顔面を真っ赤に染めながら妖怪狸は応える。

「…まあまあ、それくらいにせんか。あまりおだてられてはこちらも本調子ではなくなるからの」

「でも…」

「儂ができることは本当にきっかけにしかすぎん、結果が良い方向へ転がったのは何にせよ、お嬢さんたちのそうなりたいという心がさせたのじゃよ」

その言葉に、桃色髪の少女はふと妹を見る。妹は泣き顔には似合わない笑顔を浮かべている。その「目」はまだ閉じており、「さとり」としての再覚醒はまだ先だろう。でも、確かにあの子の「なりたい」という心、そして彼との友情があの子に「心」を取り戻させたのだろう。

桃色髪の少女は彼と対面した時のことを思い出す。貴方はあの時私に「あの子にごめんと伝えてくれ」と頼んだけど、もう…その必要はないわね。あの子はもう貴方との思い出を胸に真っすぐ歩いて行ける。だから…見守っていて、あの子の未来を。

「…お嬢さん??」

不審に思った妖怪狸がいつの間にかこちらに向けて顔に手を向けて左右に振っていた。

「え？ああ、大丈夫です。少し眠くなってきたのかもしれません。それでは、私は妹ともう一度眠りに行きます。」
「ああ、今日はもう疲れたじゃろう、ゆっくり休むがよいわ」
「…貴女は？」
「…あー、今から小芝居に行かせて空回りしてしまった妖怪の愚痴を聞かねばならんのでの。今日は久しぶりの夜通しというやつじゃて」
あからさまに面倒になったという顔をする妖怪狸の顔を見て、桃色髪の処女はくすっと笑う。その反応に妖怪狸も片目をつぶり、ニカっと笑って見せる。
それぞれの思い思いの夜は更けて、雲一つない、今宵は非常にきれいな月が４人の妖怪を照らす。

第5話

「…これが…切符…？」
「そうじゃ、「幻想郷」へ行くための切符じゃな」
「…」
桃色髪の少女と緑色髪の少女はもう一度「切符」といわれたものを見る。そして、お互いに顔お見合わせた後もう一度妖怪狸の顔を見る。
「…どう見ても招待状にしか見えないのですが…」
「うむ、それは儂も思ったから気にするでない」
一行は今、妖怪狸の住処にて話をしている。昨晩の一件ののち、「心」を取り戻した緑色髪の少女は感情を取り戻し、表情に明るさが戻っていた。
そして、彼女の姉から妖怪狸の策略であったと知り、顔を赤面させる。まさか、あの場にこの場にいる全員がいたとは…。
穴があったら入りたい気分であったが、その恥ずかしさを堪え、とりあえず妖怪狸にお礼を言う。
妖怪狸はやはりお礼を言われ慣れていないのか「気にするな」との一言を恥ずかしそ

うに述べた後、そういえばと彼女たちに例の「切符」を差し出した。そして彼女たちに「幻想郷」、「八雲紫」、「切符」について一通り説明した後、話は冒頭へ戻る。

「…お話はわかりました…、ですが…私たちが受け取ってよいものでしょうか…」

桃色髪の少女は俯きがちに応える。その言葉の意図がわからず妖怪狸は首を傾げる。

「…余計なお世話だったかの?」

「いえ、貴方の考えている通り私たちに…、こちらの世界に…居場所はありません。せっかく「心」を取り戻したこの子も、こちらの世界にいては、また同じようなことにあうかもしれない。私は、この子が「心」が取り戻した今だからこそ、向こうの世界…「幻想郷」に行くことは賛成なのです、ですが…」

桃色髪の少女はそこまで言ってまた俯く。その意図に緑色髪の少女は気付き、口にする。

「きっとお姉ちゃんは…お礼がしたいんだと思う。今まで匿ってもらったり、私を治してくれたり、それから向こうへの手配までしてくれたから…、

何もお礼もしないで行くのは…、きっと心残りができちゃうんだと思う」

緑色髪の少女の言葉に、なるほど、と妖怪狸は納得する。自分が良かれと思ってやってきたことが、逆に彼女の心の枷になっていたとは気づかず、思わず苦笑する。しかし…、これと言ってお礼なぞ考えてはいなかったため、妖怪狸は返答に困る。

「はい！…それじゃ、私たちが向こうに行くまでの間に何か考える！それでいい?!」
勢いよく、片手をあげて緑色髪の少女は自分の意見を言う。出会った当初とは全く違う印象を見せるその姿に、一瞬妖怪狸はポカンとなる。
だが、元来の彼女の気質がこのような性格であったのだと即座に納得する。桃色髪の少女もその元気な姿に思わずくすっと笑う。
「…ああ、承知した。それでは、それまで楽しみにさせてもらおうかの」
妖怪狸はそう言うとにかッと笑う。その姿に少女たちは顔を見合わせ微笑む。そして、彼女たちの「お礼探し」が始まった。

「うーん…」
緑色髪の少女は唸っていた。それと同じように桃色髪の少女も頭を捻る。
「お礼とは言ったものの…何が良いのかしらね」
「何か欲しいものでも聞いてくる??」
「それも手だけど…、私たちが手が届きそうなもので何かお礼ができる物の方がよいわね…」
「うーん…難しいよ～～」
緑色髪の少女はごろんと寝床に寝返りを打つ。あれから少女たちは一度、妖怪狸の住

処にある彼女たちの部屋に戻り、「お礼」について考えていた。
　だが、彼女の欲しがりそうなものと言っても彼女の人柄的には、「世話好きな点」しか見えてこない。そもそも知り合ってからまともに話をしたのが先のことであったため、彼女の「嗜好」や「性格」についてもよくわかっていない。そんな相手に「お礼」を考えるのは、正直なところ難題であった。
「お礼」を考え始めて半刻ほど。早くもその計画が座礁しそうになっていた。
「…やっぱり欲しいもの聞いてくる？」
「…」
　緑色髪の少女の白旗宣言に桃色髪の少女は黙り込む。そしてそっと自分の「目」に視線を落とす。
「…いいえ、もう少し考えましょう。あの人は私たちのために時間をかけて準備してくれたんだもの。私の「目」でそれを探るのは簡単だけど…、
　それは…釣り合わないと思うから」
　桃色髪の少女はそう言うと、緑色髪の少女に向き合う。そしてにっこりと微笑む。
　その顔に緑色髪の少女は驚き、楽しそうに言葉を口にする。
「…お姉ちゃん…、そうだよね！時間ギリギリになるまで考えよう！」
「…ただし、私たちの身支度の時間も考えないとね。貴方、一度考え事すると他のことが

手つかずになるんだから」
「もう、わかってるってば！」
桃色髪の少女は笑い、緑色の髪の少女はぷくっとほおを膨らませる。彼女たちの「お礼探し」は、妖怪狸のお礼を探すとともに、彼女たちの止まった時間を動かすための時間であった。彼女たちは、他愛もない会話を繰り返しながら「心」を失ってからの姉妹の時間を取り戻す。お互いの絆を確かめ合うように。

妖怪狸は1人自室に籠り、物思いにふけっていた。部屋の隅の一角に置いてある椅子に腰かけ、部屋を眺める。そこには、先代が残していった遺品が数多く飾られていた。先代…彼女の師匠にあたる妖怪狸は、かつての百鬼夜行の一員であり、そしてその頭角でもあった。
人間と妖怪との抗争で命を落とし、その報告だけを受けた彼女は絶望と復讐心が芽生えた。が、不意に先代の言葉が脳裏をよぎる。
「…人間と妖怪ってのは、その種族だけが違うだけで「心」ってのは一緒なんじゃ。そりゃ、誰かが殺されりゃ恨みたくもなるし、殺したくもなる。
だけど、「恨み」ってのは恐ろしいことに繋がっていっちまう。妖怪が人間を殺し、人間がまた妖怪を殺す、その負の連鎖が。

だから「恨むな」。例え、儂が死んだとしてもそれの仇を討とうと思って殺したのなら、また止まらんくなる。我慢するってことじゃない。

復讐に駆られるよりも、まず自分の周りを見渡せ。助けを求めている奴がいたら助けろ。泣いているものが居れば、その理由を聞け。

怒り狂うやつがいれば、止めろ。…つまり何が言いたいのかっちゅうと…周りの皆が気楽に笑顔で暮らせるように行動するってことじゃ」

人一倍、いや妖怪一「お人好し」と言われた先代は自身が持つ「変化」の能力を駆使し、その抗争でも戦っていたのだろう。それこそ、彼の言う理想通り「殺さず」に。きっと人間と妖怪とが手を取り合えるそんな世界を夢見ながら。

彼女は先代の「理想」を引き継ぎ、「恨む」ことをやめた。先代の遺言通り、周りが笑顔で暮らせるように行動してきた…つもりだった。

だが、思っているよりも抗争の爪痕は強く、「恨む」ことをやめたものは多くはなかった。そればかりか復讐心に駆られるものが後を絶たず、彼らを諭そうとしたが受け入れてもらえず、結局彼らに何もしてやることはできなかった。彼女は何もしてやれない自分に嫌気がさし、1人隠居した生活を送っていた。そのうち、彼女のことを知るものは少なくなり、そして先代の「二ツ岩」の名だけが彼女に残っていた。

「儂は…彼女らにうまくやれたかの…」

誰もいないその虚空に向かい、1つ問いかける。ふと彼女らに出会った時、儂は咄嗟に行動した。それは先代の「理想」だから動いたというものではない。

儂が…そうせねばならんという予感めいたものがあったからだ。それからの行動も彼女たちの事情を聴き、そして「最善の手」を考えた。

これはかつて儂がとってきた「理想」のために動いた行動とは全く異なるものであった。

そこまで考えて、彼女は閃いた。そうか、先代と儂で違った点は…こういうことか。先代の周りには、彼を慕う妖怪が数多くいた。

それはきっと、先代自身の無自覚な奔放さ、手厚さに惹かれたものであったのだろう。

当時の儂は、同情さにばかり目がいき、彼らの目線で行動していたが、それでは結局彼らの目線でしか考えられない。その先を考えるならば、儂がその模範にならなねばならなかったのだと…。

彼らの模範的な存在、強いてあげるなら憧れのような存在こそが先代であったのだと今更ながらに納得する。

「彼女らは…うまくやっていけるかの…」

その虚空にもう一つ言葉を投げかける。八雲紫が「切符」を渡した際に言った言葉。

「ルールに沿って行動できるのなら幻想郷側としては大歓迎ですわ」

現代とは違う、異なった場所での異なったルールで生きる。そして一歩でも踏み外せば、即座にその首が断首されることになる。そんな危険なところへ彼女らを行かせて本当に大丈夫なのかとあの時の不安がよぎる。だが、その危険を顧みず、幻想郷へ行くと決めたのは彼女ら自身でもある。

願わくば…彼女らが無事で、そして欲を言うならば幸せに暮らせて生けることを願う、と妖怪狸は目を閉じる。

第6話

翌日、桃色髪の少女と緑色髪の少女は妖怪の区域の市に来ていた。目的は「お礼」の品を作ってもらうことだ。結局あれから色々と考えた結果「ある物」を贈ろうということになった。だが、それには結構な時間が要するため、姉妹はその作成者を探しに市に出向いていた。

「さとり妖怪」であることは何かと面倒になるため、二人は可能な限り「目」を隠し、市を巡っていた。そして、とある店の店主に尋ねてみたところ、市のはずれにある店に居を構えているとのことであったので、その場所に向かう。

市から歩いて四半刻、何とかその店にたどり着きその店の入り口を開ける。「いらっしゃい」と声がして、年配の妖怪が顔を覗かせる。

年配の妖怪は、姉妹を見るなりふと驚いたような表情を見せた。「おや、これはまた可愛らしいお嬢さんが来たね」そう言うと、年配の妖怪はお茶の用意を始める。

「あ、あの結構ですので…」桃色髪の少女は断ろうとすると、「いいんだよ、ゆっくりしていきな」と年配の妖怪に切り伏せられた。

年配の妖怪は近くのテーブルに着くよう指示し、二人が席に着席し、二人分のお茶を

二人の少女に差し出す。そして、漸く話が始まった。
「で、うちの店に何か用かい？」
「はい、ここでは手作りの品を作っているということで伺いました。そこでこちらの品を作っていただきたいのですが…」
そう言って桃色髪の少女は一つの紙を取り出す。それには、「ある品物」の設計図及び要求事項等が書かれていた。
年配の妖怪はそれを受け取ると、その「品物」の見取り図を眺める。そして、尋ねる。
「…これをいつまでに作ればいいんだい？」
「…可能であれば、２日後の朝にお願いしたいのですが…。」
「…それは中々に急なお話だねぇ」
そう言うと年配の妖怪はふと見取り図から目を逸らした。そこにはあからさまに面倒だと言わんばかりの表情が浮かんでいた。
桃色髪の少女はその様子に俯く。やはり無理か…。そう思っていた矢先に緑色髪の少女はその頭を下げていた。
「急なお願いで無理を言っているのは分かっています。でも、その品物を贈りたい人がいて…、私たちのこれからを変えてくれた大事な人なんです…だから…お願いします!!」

突然の言葉にその場にいた桃色髪の少女は驚き、合わせて「お願いします」と頭を下げる。

二人の少女のお願いに年配の妖怪は腕を組んで熟考した後、尋ねるように問いかける。

「あんたたちの気持ちは分かった。…ところでこれを贈る相手ってのはどんな奴なんだい？」

「えっと…、狸の妖怪さんみたいで色々なものを葉っぱ一つで化けさせることができるひとなんです。」

たどたどしく、緑色髪の少女は答える。そして、それを聞いた年配の妖怪の様子が変わった。

「！…狸の妖怪…ね」そう言うと、年配の妖怪は奥に引っ込む。そして一枚の写真を持ってくると二人の少女に見せる。

「この妖怪のことかい？」と年配の妖怪は写真の一部を指さす。そこには、様々な異形の妖怪が並んでいたが、一人尻尾を生やした明るく笑う若い女狸の姿があった。

「…今と雰囲気は違いますが、おそらくそうだと思います」桃色髪の少女は答える。

その返答に満足したように年配の妖怪は頷くと、その写真を懐に仕舞い、こう言った。

「依頼は了承したよ、二日後の朝だったね。それまでにこちらは仕上げておくよ」

さっきまでとはうって変わった態度に桃色髪の少女は動揺し、慌ててお礼を述べる。
「…ありがとうございます!えっと…お代は…」
「いらないよ」
「え…?」
「いらないって言ったのさ。その代わりと言っちゃなんだが、こいつを渡すときに言付けを頼んでもらっていいかい?」

少女たちは無事に依頼を終え、帰路に着いていた。道中、緑色髪の少女は「あ!」と言って、立ち止まる。
その行動に桃色の髪の少女は振り返る。「どうしたの?」
「えーと…、閃いちゃった!」えへへっと笑い顔を浮かべる妹の顔には何かいいこと思いついた!という顔が浮かんでいる。
本当に我ながら、我が妹は感情がわかりやすくて良いなとほほえましく思う。
「それで…、どこか寄りたい場所でもあった?」
「うん!、あそこのお店いってみよう!」
緑色髪の少女の指さしたその先の店を見て、桃色髪の少女は「ああ、なるほど」と納得した。

「…きっと、素敵な贈り物になるわね」緑色髪の少女の意図がわかり、桃色髪の少女は答える。
「うん！」少し赤くなった顔を隠すように、緑色髪の少女は足早に店の方へと駆け出す。

時は流れ、あっという間に旅立ちの日となった。身支度を終え、あとは「お礼」の品を贈るだけとなり、桃色髪の少女は再び、あの店を訪れていた。店の扉を開け、「カランコロン」という呼び鈴がなり、店主が顔を出した。
「待っていたよ。一応、しっかりと作ったつもりだがね…見てくれるかい？」
そう言うと、店主もとい年配の妖怪はその手に持ってきた「お礼」の品が入っている箱を見せる。白い包み紙に包まれたそれを慎重な手つきで開封すると…、予想以上の出来のものがそこにあった。
その出来に少女はほう…と息をのむ。そして桃色髪の少女は言う。
「…素晴らしいです！ありがとうございます。でも、本当にお代は…」
「いらないって言ったはずさ、その代わりの言付け忘れずに届けておくれよ」
そう言うと、年配の妖怪は軽く片目をとじて見せる。その仕草に見た目とは違った愛嬌の良さを感じ、少女は微笑む。
「…わかりました！必ず伝えます！」

そう言い、少女は慎重な手つきでそれを元の箱に戻す。年配の妖怪はそれを見届けると、満足げに店の奥に戻る。

その姿に、桃色髪の少女は一礼する。あの人も…私たちと同じように救われたのかもしれない。そして、そのお礼を言えずに…誰かが来るのを待っていたのかもしれない。

…私たちはもうこちらの世界に戻ってはこないけど…、この品があの人たちにとって再開の印となれれば…!

その「お礼」の品に複数の思いが込められていることを知り、桃色髪の少女はその願いを届けに帰路を急ぐ。

「お姉ちゃん〜!!」

目の前から聞き覚えの声がする。ふと前を見ると、その手いっぱいに「例の品」を抱えて妹が手を振っていた。

「…受け取った?」

「ええ、見せてもらったけどかなり良い出来だったわ」

「え〜、私も見たかったな」

「…渡したときに見てもらおうか?」

「うん!」

元気よく返事をし、妹はその「例の品」を両手に抱え直す。ふと、その「例の品」を見ると、その中に別のものが混じっていることに気付いた。
「…それは?」指をさして妹に尋ねる。妹は一瞬ドキッと顔を硬直させたが、申し訳なさそうに顔を逸らしながら言う。
「えーと…うーん…、今日で最後だから…」その表情に照れ隠しが見えているのがわかる。
そして妹の意図がその品の「言葉」で理解し、ふふっと笑う。
「…喜んでもらえると良いわね」
「…うん!」妹は力強く頷く。私たちはそれぞれの思いを胸に再び帰路へ急ぐ。

姉妹が帰ると、ささやかながら妖怪狸の計らいにより夕食の用意がされてあった。すぐさま手伝おうとするが、すでに準備は終わっているらしく、すぐに
夕食となった。他愛もない話をし、腹を満たし、準備を終え、旅立ちの時間が近づいていた。
「いよいよだね…!」
「そうね…」
緑色髪の少女は緊張した上面で顔に笑顔を作る。桃色髪の少女も同様に顔を強張ら

せる。「お礼」の品については、旅立つ前に渡したいと伝えてあった。
そして、その準備が整い次第渡す予定であったが、実際渡すとなると「本当に受け取ってもらえるのだろうか」と不安になる。
だが、「お礼」の品を渡すのは私たちが決めたことであり、店主の言付けもある。彼女らは覚悟を決め、部屋を出る。
「…なんじゃ、戦にでも行くような形相じゃの」
少女たちの強張った表情にふと妖怪狸は冗談交じりの笑みを漏らす。その言葉に幾何か緊張が解け、二人はそれぞれに「お礼」の品を差し出した。
一つは箱、そして一つは花束であった。妖怪狸は嬉しそうに気恥ずかしそうにそれらを受け取り、まずは花束を見つめる。
赤と紫色の色とりどりの大きな花が覗かせるそれを見て、妖怪狸は問いかける。
「これは…？」
「はい！その花は私が選びました！花言葉っていうものがあってそのお花の花言葉は「感謝」っていうんだって。ピッタリでしょ！」
そう言いつつ緑色髪の少女は胸をずいッと張って見せる。その姿に妖怪狸と桃色髪の少女は笑う。相変わらずの元気な姿にそして洒落た贈り物をもらい妖怪狸はありがとうの、と緑色髪の少女に片目をとじて見せる。緑色髪の少女は予想通りの反応に嬉々

とし、笑顔を作る。
そして次に箱の方を開けてみる。
そこには…、緑色の帽子があった。形状は盆踊りで被るような編み笠の形状だが、その編み目はほとんどなく単一の緑色で統一されていた。
そして、帽子の両端には金色の鈴とリボンが飾られていた。思いもかけない高級な贈り物に妖怪狸は感嘆の声を漏らす。
「おお…見事なものじゃ、ありがとうの。これは手作り品かの?」
「はい、市の方に出向き、一から作ってくれるお店にお願いして作っていただきました。全体的な構想は私が立てて、リボンや鈴は妹のアイディアになります」
「鈴は、お姉さんと初めて会ったときに私たちを猫にしたところから持ってきたよ!それから、リボンはワンポイントみたいで可愛いなと思って!」
姉妹は思い思いの作品のポイントについて説明する。楽しそうに話すその声に頬が自然に緩む。
「ありがとうの…、しかし、この特注品は高かったのでないのかの?」
「いいえ、実は言付けを預かっているのです…」
桃色髪の少女はその帽子の作成者の言付けを伝える。その昔、妖怪と人間の抗争で自分の家族を失ったときに一緒に泣き、励ましてくれた妖怪がいたこと。

自暴自棄になり復讐心に駆られた自分を止め、正しい道に戻してくれた妖怪のことを。そして、最後彼女に言い忘れていたことがあったこと。

「…私のために一途に色々としてくれたけど、私は貴方に何も返せてはいない。だから、彼女たちの贈り物に借りて礼を言わせてもらいたい、本当にありがとう」

桃色髪の少女は言付けを言い終えると、部屋の中は静寂に包まれた。妖怪狸は…泣いていた。そして自身で泣いている姿に驚き、服の端で涙をぬぐう。

「…いやはや、恥ずかしいところを見られてしまったの。そうか…あの人は無事でおった、それだけで十分じゃったが…、儂のしてきたことは…間違いではなかったのじゃな…」

妖怪狸はたどたどしく言葉を紡ぐ。先代の「真似事」では誰も救えなかったと嘆いていたが、救えていたものもあったという事実に、妖怪狸は胸が熱くなっていた。その意図を読み取ったのか、桃色髪の少女は声をかける。

「…きっと救えています。その人だって、私たちだってそうです。貴女は良かれと思って多くの人に最善の手を尽くしてきている。皆が皆言葉では言い表せなくても、心の内では必ず救った人のことを覚えています。だから…、1人で悲しまないでください…。貴女のことを思ってくれている人が沢山いるんですから」

その言葉が妖怪狸の胸を打つ。そうじゃな、と妖怪狸はひとり呟く。あふれ出る涙を

ぬぐい、もう一度前を向く。
　儂は忘れていた…、儂のしてきたことに関して儂は一切感謝の意を受け取らなかった。すべては儂の思うようにお節介を焼いているだけ。じゃから、彼らから受け取る物などないと。
　じゃが、それは彼女らの感謝の意を否定していることに他ならない。言葉にしないだけでそれぞれがその感謝の意を持っており、彼女らはそれを言いたいのだ。
　独りよがりではだめだ、もっと彼らの心の声を聞くために、彼らが笑顔になるように儂からその心を開いていかなくては…。
「本当に…ありがとうの」
　そう言って妖怪狸はまるで我が子のように二人の少女を抱きしめる。二人の少女は顔を見合わせ、お互いに笑顔を作る。
「お礼」の品作戦の成功を心の中で祝いつつ、そして妖怪狸の心にようやく触れられた気がして、二人の少女は強くその光景を焼き付けるのであった。

第7話

子の刻まであと四半刻。妖怪狸の住処の入り口で緊張な面持ちで一行はその到着を持っていた。一人の少女を除いて。この場にいない、緑色髪の少女は「ごめん、時間には戻るから先に行ってて」と言付けだけ残し、どこかに行ってしまった。その慌てた姿に妖怪狸は疑問に思ったが、桃色髪の少女は「わかったわ」と一言残し、彼女を見送った。

「大丈夫、彼女なりの最期のお別れを言いに行っただけですから」

桃色髪の少女のその言葉を聞き、なるほどと妖怪狸は納得する。二人は晴ればやかな夜の静寂の中、彼女の到着を待つ。

「…これで…よし!」

妖怪狸の住処近くの森の中、その中の一つ、大きな木の前で緑色髪の少女はひとりお供えをしていた。区域の市で買ってきたお供え物を用意し、さらに花束を置く。花束の白い包装の中には黄色い花と、白と桃色の花が添えられていた。

「この花の花言葉はね…、「友情」と「また会う日まで」っていうらしいんだ…」

1人呟くように話しかける。そこに彼がいるように。
「きっと…私たちにぴったりだなって思って！変わらない友情って素敵だと思うでしょ。それにきっと向こうに行っても私たちはどこかで出会える、そんな気がするんだ！」
少女は気丈に振舞って見せる。が、その目には涙が浮かんでいた。
「…私が「心」を失う前から君は私の…私たちの傍にいてくれた。
私たちは君から大切なことを教わった。悪戯も悲しみも怒りも喜び、そして友情も…。そのひとつひとつの積み重ねが私たちを作り上げてきてるんだ。
その積み重ねを壊したのは、僕のせいだと言うかもしれないけど、結局私は君にもう一度助けられた。自分の責任っていうかもしれないけど、そうじゃないの。
だって君が「僕と出会ってくれてありがとう」って言ってくれたように、私も「君に会えて本当に嬉しい」って思ったから。私たちの友情が奇跡を起こしたんだよ…」
あふれ出る涙が止められないまま、少女は話し続ける。そして意を決したように、前に向き直る。
「私は…もうこちらの世界に戻ってこないかもしれない…、君だけには「最期の」お別れを言いたくて来たんだ。」
そして、少女は涙をぬぐい、笑顔で声を張り上げる。

「今まで本当にありがとう！…さようなら…！」

そう告げると少女は向きを変え、森の出口へと向かう。一人の少女の強い思いにこだまするかのように森がざわめく。まるでそれは別の世界に行こうとする彼女を応援するかのように。

彼女が置いた花束が律儀に「いってらっしゃい」と言っているように揺らいでいた。

子の刻まであと少し。もう両掌の分の刻しかなくなっていたが、桃色髪の少女は妹の帰りを待っていた。その手にじんわりと汗がよぎる。それは彼女が戻ってこない焦りとこれから向かう世界への不安も混じっているからなのだろう。妖怪狸も半ば落ち着かない様子で少女の帰りを待っていた。

と、「ごめ～ん、遅くなった～」と森の方から駆けてくる人影が見えた。その声にほっと胸をなでおろすと、桃色髪の少女は「遅い！」と緑色髪の少女の頭に手刀を振り下ろす。「いだっ」とリアクションをとる姿に、妹がいつも通りであることを確認し、「…もう大丈夫なの？」と確認する。

緑色髪の少女は、「うん、もう大丈夫」とぎこちなく笑って見せる。その姿を見て、桃色髪の少女はぎゅっと妹を抱きしめる。

「ちょ、ちょっとお姉ちゃん？」戸惑うように桃色髪の少女の胸の中で緑色髪の少女は困

惑する。

「今まで、私は貴女のことをしっかりと見てあげられなかったかもしれない。だけど、これからは「一人の姉」として、貴女のことを見守っていくわ。だから…悲しい時はいつでも泣いていいんだからね」

その言葉に緑色髪の少女は涙腺がまた緩くなる。「お姉ちゃん…ありがとう」と小さな声で呟く。その小さな声に桃色髪の少女は優しく妹の頭をなでる。

「あー…お熱いところ申し訳ないがの、そろそろ時間のようじゃ」

完全に空気と化した妖怪狸の申し訳なさそうな声にハッと我に返る姉妹。そしてお互いに慌てたように取り繕う。始めて見せる姉妹の仲睦まじい姿に妖怪狸はほっこりしながら、確信する。この姉妹の絆があれば、向こうに行っても大丈夫かの。老婆心ながら行く先を案じていたが、どうやら杞憂だったようであると妖怪狸は考えを改める。

そして…時間が丁度子の刻となった時、妖怪狸の住処の入り口の空間にバリッと亀裂が入る。3人の妖怪はその空間何からかが飛び出してくるのを感じ、瞬時にその場を離れる。

それと同時に、一行が立っていた場所に勢いよく「列車」が姿を現した。急に現れたそれは何両目かの中腹まで顔を出すと、少女たちの前で停まり、その車両からプシュッと音を出した。

その音が扉の開閉音だとわかり、中から一匹の妖怪がゆっくりと出てきた。
「こんばんはー、幻想郷行特急列車只今到着いたしました。失礼ですが、ご乗車の方はどちら様でしょうか？」
そう質問してきたのは、…尻尾が多い狐の妖怪だった。頭には呪符の張ってある帽子とその中に入っているだろう際立った獣の耳、白と青の道化服、そして服の前には特殊な模様が施されていた。
目の前のその突然のことに少女らは動けずにいると、妖怪狸が助け船をだす。
「八雲紫殿の使いで…問題ないかの？」
「ええ、左様であります、それでご乗車の方は貴女でしょうか？」
「いや、こちらのお嬢さん方じゃよ。」
そう言うと、八雲紫の使いは少女らに向き直り、そして、笑顔で尋ねる。
「ご乗車の方は「切符」を拝見いたしますので、ご提示をお願いいたします。」
桃色髪の少女はその言葉に我に返り、用意していた二人分の「切符」を差し出す。使いはそれを確認すると、「はい、確かに確認いたしました。それでは、足元にお気をつけてご乗車願います」と、これまた笑顔で対応し、使いは車両の中に姿を消す。
いよいよ向こう側への入り口に立ったと思い、少女たちは足をすくめる。その姿に妖怪狸は近寄りその背中を軽くポンと叩いた。

まるで故郷を旅立つ若者を見送るように、そして彼女らがしっかりと自分の足で進めるように。その小さな気遣いが彼女らにも伝わったのか、ゆっくりと車両に足を進める。

そして、車両の入り口前まで来たところで少女たちは振り返り、妖怪狸に対峙する。その顔には…、憂いもなく晴れ晴れとしていた。

「…今まで本当にありがとうございました。このご恩は一生忘れません。」

「ありがとう！お姉さん！…それじゃ…」

「「行ってきます!!」」

二人の少女は息を合わせて、元気に告げる。まるで母親にでも言うような旅立ちの言葉を。

妖怪狸はその言葉に胸が熱くなるものを感じたが、グッと堪え、笑顔で答える。

「おう！こちらこそ楽しかったぞ！それじゃ…、気をつけての！」

他に言いたいことが沢山あったが、妖怪狸はそれしかいうことができなかった。いや、その心の内の言葉もきっと彼女たちには伝わっているだろう。「さとり」の能力を使わずともお互いのことを理解しあい、思いあった仲ならば言葉一つで伝わる物なのだ。

妖怪狸の言葉を最後にプシュッと音が鳴り、その扉がゆっくりと閉まる。ゆっくりと車両が動き出し、車両が出てきたその空間の亀裂に進んでいく。

最後の車両が亀裂に入っていくその最後まで妖怪狸は車両に手を振り続けていた。

彼女らを見送ってしばらく経ち、丑三つ時となった。

月明かりに照らされる野ざらしの切り株に腰掛け、妖怪狸はキセルを片手に物思いにふける。

口元にそれを運び、一服した後、深く深く白い煙を吐き出す。

「おや、煙草を吸ってるなんて珍しいね」

ふと背後からかけられたその言葉に、振り向く。そこには、変化をしていない黒髪の少女の姿がった。

「そちこそ、ここを訪ねてくるなんて珍しいの」

ふと現れた妖怪に目を移しつつ、妖怪狸は尋ねる。

「いやー、あの子たちが居なくなって寂しくなってるんじゃないかなって思ってさ」

「…」

半分冗談交じりに言った言葉だったが、不覚にも確信をついてしまったらしい。慌てて、黒髪の処女は弁明する。

「って冗談冗談、そんな怒んないでってば」

「ぬえ」

はっきりと名前を呼ばれ、そこに凄みが増しているのがわかる、あちゃーこれは一発殴られるなと思いつつ、黒髪の少女は目を閉じる。

…と思ったが拳がとんでこない。恐る恐る目を開けると、そこには覚悟を決めた妖怪狸の凛々しい顔があった。

切り株に胡坐をかき、そして少女に対面した妖怪狸は意を決したように口にする。

「儂は…百鬼夜行を作る。それこそ先代の率いていた百鬼夜行ではない、儂の百鬼夜行を」

突然のその宣言に一度黒髪の少女はポカンとする。と我に返り、妖怪狸に尋ねる。

「い、い、いきなりどうしたのさ?」

「何、ここ数日色々と思うことがあっての。昨晩あった出来事がきっかけでようやく踏ん切りがついた」

その顔には憂いはなく希望に満ち溢れていた。

黒髪の少女はその急激な変化に戸惑いを見せつつも、確認する。

「…それで、百鬼夜行を作るって言ってもどうやって作るのさ、人手も足りないんでしょう?」

「そこを主にお願いしたいのじゃよ」

「はぁ?っていうか、私もその百鬼夜行に入ってるの…?」

当り前じゃ、と言わんばかりに妖怪狸は頷く。その言動に半ば呆れながら、黒髪の少女はしぶしぶ了承する。

だが、心の内ではしばらくぶりに活気を取り戻した親友の奔放さが心地よかった。

そして、…親友の傍らに見覚えのない帽子が置いてあるのに気づく。

「ねえ、それって…？」

黒髪の少女は尋ねる。

妖怪狸はその帽子を手に取ると、ぶかっと被って見せる。そして「「お礼」の品じゃ」と言うとニカッと笑って見せる。

黒髪の少女はその返答に、頭に疑問符を浮かばせる。

その様子が面白く、妖怪狸は上機嫌のまま月を見上げる。

今宵の月は格別に美しく、誰かの笑顔を映し出したかのように晴れ晴れとした黄色に染まっていた。